

伊藤組の恩師から 引き継いだ宝物

「私の宝です」。オオイ工務店（本社・札幌）の大井貞雄社長は、ぶ厚い本を机の上に置いた。

表紙は味気ない。白地に黒字で「重要文化財北海道

赤れんが庁舎を長年、お世

話してきた工務店がある。まるで我が子のように。堅牢な建物でも風雨にさらされ、時には災害に見舞われ、傷を負う。『お守り役』がいたから、本道のシンボリックな建造物は時の刻みに耐えてきた。

元復元赤れんが氏と大井貞雄
報告書の改修工事

重要文化財北海道庁本庁舎復元改修工事報告書

北海道

雨ニモマケズ 風ニモマケズ お守り役 25年



「文字通り朝から晩まで、延々と天然スレートの厚さを1枚ずつノギス（定規の一種）で測っ

た時もありました」天然スレートとは、岩を手割りして加工した建材のこと。使用できる厚さは基準の1.3以内の誤差と厳格に定められ、基準外だった場合は返品された。赤れんが庁舎は屋根に10万枚を使っている。大井氏の記憶によると、3割程度を規格外でハネたという。つまり、トータルで13万枚もの天然スレートを測った計算になる。「今なら器械でピッと1発で厚さを測れますが、当時は手作業です。一体、いつ終わるのかと思いました」コワイイ体験もした。工事期間中、夜の館内を見回すのも大井氏の役目だった。「警備員も帰った後の誰もいない暗い館内で、背後から足音が聞こえました。振り返っても誰もいない。そんなことが何度も……」当時、赤れんが庁舎に幽霊が出るという噂は関係者

工事関係者に寄贈されたり、道立文書館などで所蔵されているもの、一般の間で残っている冊数はそれほど多くはないだろう。

この貴重な1冊が札幌の中規模工務店にある。その経緯こそ、大井氏が赤れんが庁舎の『お守り役』を務めることになった背景だ。「私が伊藤組土建を退社したすぐ後だったと思います。先輩の田中章三さんから『あなたに引き継ぐから』と手渡されました」

本道の名門・伊藤組土建

は1968年、赤れんが庁舎の大規模復元改修工事を請け負う。大成建設とのJVだった。田中氏は当時、着工から完了まで現場で汗を流す。その経験と実績が買われたのだろう。15年後の伊藤・大成JVによる赤れんが庁舎の屋根改修工事。田中氏は、現場の最高責任者ともいえる所長の任に就く。当時の社内報に田中氏は文章を寄せている。

「北海道が生んだ貴重な文化遺産を（中略）改修する機会を得、大変光栄に思います。また、その責任の重大さを痛感しております」と。

田中所長の下で走り回っていたのが、入社4年目の大井氏だった。若手なので何でもやった。

「北海道が生んだ貴重な文化遺産を（中略）改修する機会を得、大変光栄に思います。また、その責任の重大さを痛感しております」と。

「今なら器械でピッと1発で厚さを測れますが、当時は手作業です。一体、いつ終わるのかと思いました」

コワイイ体験もした。工事期間中、夜の館内を見回すのも大井氏の役目だった。

「警備員も帰った後の誰もいない暗い館内で、背後から足音が聞こえました。振り返っても誰もいない。そんなことが何度も……」

当時、赤れんが庁舎に幽霊が出るという噂は関係者

の間で広く知られていたよ
うだ。実際、この工事を始
める前、おほらいがおこな
われたという。

赤れんが庁舎という歴史
的にも重要な現場で働き、
仕事にさらに熱が入ってい
た大井氏だったが、2年後、
家業を継ぐ準備のため、退
社する。

しかし、会社を去っても、
田中氏との交流は続いた。

田中氏は定期的にオオイ
工務店を訪れ、後輩に心を
砕いた。

「田中さんは面倒見のい
い先輩でスポーツ好き。私
が高校球児だったこともあ
つてか、かわいがってくれ
ました。伊藤組土建の野球
部の試合で私が凡退すると、
『おい、北海高校の3番バ
ッターだったんだろ』とか
かわれたのを今でも覚え

赤れんが 庁舎秘話

ています」
大井夫妻
の仲人も田
中氏は引き

受けた。

「赤ん坊だった長男も連れ
家族で年始の挨拶で田中さ
んのお宅にうかがったこと
もありました。その息子も
30歳を過ぎました。今年春
から営業部長としてうちで
働いています」

命綱1本でおこな った緊急の調査

オオイ工務店は99年、赤
れんが庁舎の屋根の部分葺
き替え工事を請け負った。

前年、赤れんが庁舎から
一部のれんがが落下。道庁
からの依頼で調査を引き受
けたのが、きっかけだった。
実は93年、94年頃から、
赤れんが庁舎のハード面で
問題が発生すると、真つ先
に大井氏に連絡や相談が来
るようになっていた。

なぜか。赤れんが庁舎が
国指定の重要文化財である
ことと関係する。
重要文化財の工事では、

使用する建材の規格はもち
ろんのこと、全ての作業工
程に気を配る必要がある。
現場でもチェックが入る。

例えば足場を組むにも、
気をつかう。外壁に穴をあ
けて足場を固定するなどは、
もつてのほかだ。

屋根に足場を組む場合は、
単管と屋根材が接するポイ
ントを極力減らす。接する
場合は間に木材などを保護
用にかませる。葺き替え作
業をする時も、職人が天然
スレートの上に直接、足を
載せることはしない。

そうした重要文化財なら
ではの細かいルールを、大
井氏は熟知している。現場
での経験と知識の両サイド
からだ。83年の工事の時、
大井氏は重要文化財の監督
者との打ち合わせも担当し
ていた。

一方、道庁では担当者は
通例、数年で人事異動とな
る。次第に大井氏の存在は、
歴代の道庁担当者間で引

継ぎ事項のようになってい
った。「赤れんが庁舎で何
かあったら大井さんに」と。
大井氏の古巣・伊藤組土

建にも当初は、多少のノウ
ハウが残っていたはずだ。
ただ、オオイ工務店のほう
が話の通りが早く、緊急性
が求められる場合や細かい
事案でも機動力が高い。道
庁としては頼みやすかった
面もあったのだろう。

こうしていつしか、大井
氏は赤れんが庁舎の「お守
り役」になった。相談など
を受けるようになった93年、
94年頃から数えると、約25
年間、お役目を果たし続け
ている。

この間、ヒヤヒヤする瞬
間もあった。10年以上前の
こと。道庁担当者から緊急
連絡が入った。「棟飾りが
はずれた。急いで現場調査
をしてほしい」

足場を組む余裕はない。
大井氏は屋根窓から外に出
て急勾配の屋根を移動し、

破損部分を確認するしか
なかった。

「命綱は落下防止用ワイヤ
ーだけです。その1本を屋
内で社員ら5、6人が握り、
私の体を支えました。この
時ふと、もし社員に嫌われ
ていたら私は落ちて死ぬな
と思いましたよ」と笑う。

重要文化財を相手とする
工事や作業は前述の通り、
通常の仕事よりも手間と時
間がかかる。儲け目当てで
は続けられない。

名譽ある仕事を恩師から
引き継いだという思い。そ
して「赤れんが庁舎の事情
を理解しているという自負」
が、労の多い役目を続ける
動機となった。

赤れんが庁舎は2020
年中に大規模な改修工事に
入る見込み。63歳の大井氏
にとつて、区切りをつける
タイミングにも映る。

「ようやく重責から解放さ
れるかなと、ホッとしてい
ます」
(野口)